

書 評

藤野 寛著

『アウシュヴィッツ以後、詩を書くことだけが野蛮なのか アドルノと 文化と野蛮の弁証法』

(平凡社、2003年刊)

原 千 史

Hiroshi Fujino,

Ein Gedicht nach Auschwitz zu schreiben, ist das allein barbarisch? – Adorno und 《Dialektik von Kultur und Barbarei》

Chifumi HARA

今年(2003年)はアドルノの生誕100周年という一つの節目となる年であった。これを機に、ドイツはもとよりスイスなどでも記念の展覧会や学会・シンポジウムが盛大に開催され、確かにこれで一つの時代が画された感がある。アドルノに関する伝記も多数刊行され、これまで知られていなかったアドルノの一面にも光が当てられるようになったのは、まさにアドルノへ向ける回顧(懐古)の眼差しそのものと見受けられる。ただ生誕100周年だからといって、それに乗じてアドルノを過去の哲学者として回収しようとする動きが見られなくもない。藤野氏も強調するように9.11以降の今日こそ、文明と野蛮の共犯関係を見据えたアドルノの思想は、そのアクチュアリティを増しているのだ。日本では、評者の知る限り、特に大きな記念の催しが

開かれたわけではないが、これを機縁としてアドルノに関する研究書が2冊、いずれも平凡社からほぼ時を同じくして刊行された。そのうちの一冊がここで取り上げる藤野氏の著作である。

本書は序論に続いて第一部、第二部と大きく三つの部分から構成されている。『ミニマ・モラリア』をもとにした序論は筆者によるアドルノ思想への入門であり、それにつづく第1部は本書の中心部ともいえるアドルノの文化理論を扱っている。この第一部の冒頭論文の表題が本書自体の書名となっている。些細なことかもしれないが、上に述べたほぼ同時期に出たアドルノ論集『アドルノ 批判のプリズム』にもまったく同一の論考が収められている。本書は単著であり、またアドルノの文化理論を論じるうえ

では是非とも重要だと考えられてのことだと察することはできるが、ほぼ同時期に同一の出版社から同一論考を重複掲載するのは、評者としては、奇妙な感を払拭しえない。

第二部大半は、筆者の解釈によれば「フィールドワーク」と位置づけられている、ドイツの現代文化事情を紹介した新聞コラムを集めたものである。そして最後は、夏目漱石、竹内好、加藤周一を手がかりにして異文化経験を考察した論考で締めくくられている。

* * *

すでに藤野氏は前著『アドルノ／ホルクハイマーの問題圏』（2000年刊）の「まえがき」で、みずからの姿勢を明確に打ち出している。すなわち「『高踏・無形』なエッセイの類」ではなく、「アドルノ／ホルクハイマーの思想・哲学に関して、現時点で存在に値する、日本語で書かれた基礎的二次文献を提示することである」と。これに続く本書も、ドイツ事情の紹介などにあてた第二部は措くとして、基本姿勢は引き継がれているとみてよいであろう。

確かに筆者の言うとおり、これまでアドルノに関する日本語の二次文献はいたずらに晦渋だが内容空疎なエッセイの類が多かったかもしれない。このことは原文の難解さに由来する以上に、一つにはこれまでの日本におけるアドルノ紹介の担い手が主としてドイツ文学研究者であったことに原因がある。ドイツ観念論哲学、なかでもヘーゲル哲学の伝統をふまえて難解な弁証法的哲学を説くアドルノよりは、『文学ノート』や『ミニマ・モラリア』に代表される批評家・箴言家としてのアドルノの方が、文学研究

者にとって魅力的でもあり取り組みやすかったからであろう。もっともアドルノの難解なテキストを前にすれば、哲学研究者といえどもどこまで読み解けるかは『否定弁証法』の邦訳を見るかぎりでは疑わしく思えるのだが。

哲学や思想というものは、それを表現する文体と切り離して考えることができないのは自明であり、殊にアドルノのようなスタイルにこだわった思想家の場合はなおさらである。アドルノの場合それは、「エッセイ」という意識的に選び取られた形式であった。アドルノを日本で受容紹介した第一世代の人たちは、ことに文学研究者において、このエッセイという形式にアドルノの真骨頂を見るあまり、論証的側面を軽んじていたように思える。積極的（肯定的）で分かりやすいアドルノ解釈よりも、高踏なエッセイの類の方が、弁証法を駆使して否定的に世界を捉える暗い思想家アドルノには、結果として分かりにくくても、よりふさわしいとされたのである。それゆえにこそ細見和之氏の『アドルノ』（講談社、1996年刊）が出たときは、新しい世代の登場として驚きとともにある種当惑の念をもって迎えられたのである。「肯定的なアドルノを求めて」というプロローグで始まっていたのだから。とはいえこの「エッセイ指向」は今もなお、当初ほどではないが、連綿として続いているように評者には思われる。そうした「業界」の流れを一蹴するかのように颯爽と登場し、「現時点で存在に値する、日本語で書かれた基礎的二次文献を提示する」と銘打った筆者の前著は、衝撃的どころか挑発的でした。

だが筆者の語り口は気負いがなく、テンポも速すぎずちょうどよい。難しい概念も分かりや

すく噛みくだいて解説してくれる。理解を助ける例ももち出してくれるので、煙に巻かれたような読後感のみがむなしに残るエッセイに比べれば、アドルノに縁遠い読者に対してすらも、アドルノが実に身近なものになる。その最たるものが本書では冒頭の序論「『ミニマ・モラリア』からアドルノに乗船しよう」であろう。

* * *

私事になって誠に恐縮ではあるが、実は評者自身、1980年代前半に学生時代を送っていたときにこの『ミニマ・モラリア』に出会って、文字通り憑かれたように読み耽った経験を持っている。一読、この思想家に魅入られたようにさらに研究していきたいと強く思ったのだ。三光長治氏の独特だが達意の訳文で読める日本の読者は実に恵まれていると言わざるを得ない。まさに『ミニマ・モラリア』にまさる入門書はあるまいと思われるが、藤野氏は「文明／野蛮」「歴史」「幸福、愛」「経験」「観照」「文体」といったキーワードを糸口にして的確な部分を引用して、例の平易な語り口で手際よくこの書のそしてアドルノの魅力を説き明かしている。評者には「経験」について解説しているくんだりが特に印象に残った。読みながら藤田省三の文章(「ある喪失の経験」)を思い起こしていた。もともと『アエラ・ムック』のために書かれたとあるが、長くはないものの筆者の持ち味が存分に生かされた格好のアドルノ入門となっている。

* * *

さて次に、本書の中心テーマであるアドルノの文化論について見ていこう。筆者も「まえがき」で指摘しているように、近年、イギリス発祥のカルチュラル・スタディーズと呼ばれる文化研究に端を発して、人文科学の分野で「文化」への関心がとみに高まっている。ドイツでも文化学(Kulturwissenschaft)へのパラダイム転換が、独文学を初めとして1990年代以降顕著になってきている。さながら「文化」のルネサンスという観を呈している。もっともその際、文化と文化の間(異文化理解やサブカルチャー理解)に注意が向けられることが多いのに対して、自然との対比で「文化」を捉えるという従来のとらえ方は少なくなっており、わずかにドイツの文化学にその名残を残しているくらいである。

それでは、アドルノの文化論において「文化」とはいかなるものとして理解されているのか。筆者が「あとがき」で述べているように、「アドルノの文化理論に学ぶということは、文化について、それを精神主義的ではなく、物質主義(唯物論)的に、あるいは社会的に理解する観点を手放さないということ」である。通常文化といえば、学問や芸術などの分野を指して用いられることが多い。そうした精神主義的な狭義の文化概念ではなく、物質的・社会的基盤にまで立ち返って文化をとらえ、いわゆる「自然」との対照関係のうち捉えられる人間のいとなみはおよそ「文化」だとする、いわゆる広義での文化概念にアドルノは依拠している。特に従来にはない新たなとらえ方というわけではないが、この点は押さえておく必要がある。

「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」という一文ほど、アドルノの言葉と

してよく引き合いに出されるものは恐らくないであろう。この言葉の真意は、筆者も言うように、詩に代表される芸術だけが野蛮なのではなく、上で確認した自然と対置される広義の「文化」(それは野蛮との対比で使われた場合「文明」とも呼びうる)そのものがすでに野蛮なのだ、ということである。それを筆者の言葉で言えば「文明と野蛮との癒合」ということになる。「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことだけが野蛮なのか」という本書あるいは本論考の表題はしたがって、もちろんそうではないという答えを言外に秘めた、反語的な問いかけとなっている。

この文化 = 野蛮という逆説的なテーゼは、続く第二論文「文化産業 / 文化政策」でも考察され、「文化と野蛮の弁証法」と題された四節で詳述されることになる。注意すべきは、ここで言われている野蛮とは、いわゆる自然現象としての(本能的)野蛮ではなくして、自然支配能力の極限で暴発するような「文化現象としての『野蛮』」であるということだ。

ではアドルノは、アウシュヴィッツ以後の「文化」というものを単に野蛮として手放そうとするのか。あるいは公式マルクス主義的に、単なる「上部構造」として物質的諸過程の付随現象として文化をかたづけしてしまうのか。もちろんそうはいかない。かといって精神性を抛り所にして文化を擁護するわけにもいかない。そこでアドルノのとる戦略は、困難をきわめるものである。というのも文化の内にも外にも身を置くことなく、「社会の批判的自己意識」としてのポジションを堅持することが文化に要請されているからだ。

続く第二論文で筆者は、「文化産業」に言及

している。文化産業は大衆を「操作」して真の欲動充足から逸らし、ニセの欲動充足を与えているとアドルノらは診断する。そうした文化産業の関心事は「体制」の維持だとも言われる。アドルノ / ホルクハイマーらの文化産業論は第2次大戦中のアメリカで執筆されたものであり、世界情勢はその後米ソ対立の時代を経ていまや市場経済によるグローバル化が世界を席卷している。筆者も指摘するとおり、冷戦時代も過去となった今日、文化産業の主要関心事は「操作」よりも「利潤追求」に移っている。こうした状況下では、文化を市場原理から保護する形で「管理」するのがよいのか、それとも商品化して「市場」に流通させるほうがよいのか、どちらも一長一短がある。筆者はここでは結論を急がずに、なお考えを進める必要性があることを確認するにとどめている。評者が思うに、今日の状況下では、利潤追求を目標む文化産業の裏をかくようなサブカルチャー的なものに、利潤追求に走ることも管理操作されることもない批判的文化的あり方が隠されているのではないか。もちろんサブカルチャー的なものといっても、内閉して自足したのではなく、批判的意識をもって社会との関係を保持しているものに限ってのことではあるけれども。

第三論文「文化の双面性について」は文化論をしめくくるものである。「文化」は、一方で自己保存のために自然支配という物質的連関に積極的にみずからを組み込みながらも、他方ではその物質的連関から自立(自律)しようとしてその連関にあらがおうとする傾向がある。文化の双面性とは、「文化」の「自然」に対する、こうした相反する二面的関係性のことを言っている。筆者がアドルノの「文化の自律性・無用

性・役立たずな特質」への細やかな理解に寄せる共感、評者もまた共有している。「支配的实践」がますます功利性・有用性だけに傾斜しつつある今日こそ、物質的基盤を見定めつつも、文化の自律性に目を光らせたアドルノのアクチュアリティは注目に値する。

第一部最後の論考「音楽の進歩と啓蒙の弁証法」は、アドルノの歴史哲学と美学を「進歩」という言葉を媒介にして架橋する試みである。近代的合理性を批判するポストモダニストとしてのアドルノと、「絶対にモダンでなければならぬ」と断言する美的モダニストとしてのアドルノとを整合的に理解する試みとも言い換えられる。まず筆者は「モダン」という語の用法から見ていく。性質に即して時代を区分する用法としての「モダン(近代の)」とは別に、元来の意味「目下の、今現在の」に近い用法もあり、「今」を更新しつつける姿勢を指し、「前衛的な」に近い意味で用いられる「モダン」もある。後者の場合「モダン」は、過去というよりは未来へと関係づけられた言葉となっている。その前衛的な未来志向の「新しさ」が、「進歩」という価値と結びつくと、客観的拘束力(不可抗力)を帯びるようになる。啓蒙もまた、自分の一部分となっているものがいったんその自明性を喪失すると、もう元の状態には戻れないという不可逆性をともなう。「不可抗力」、「不可逆性」つまり後には引けない、前へ進むしかないという点で、啓蒙とモダニズムは共通するというわけである。ただし芸術にあって「進歩」は、「技法」や「素材支配」の上達という観点でのみ言えることであり、それだけで「芸術そのもの」が進歩したとは言えないのである。では、筆者が問うているように「芸術そ

のものの進歩とは何か」。それは評者が考えるに、技法や素材支配とも関係しながらもなお、苦悩や分裂といった現代の生(非真である全体)をミメシス的に「表現」することに成功しているか否かにかかっているのではないか。結局、「啓蒙」と不可逆性という点で共通する「進歩」だけが芸術を測る尺度ではないという平凡な結論に落ち着いてしまう。どこか期待を裏切られたような読後感を抱くのは評者だけであろうか。

* * *

第二部「ドイツ文化の現在とわれわれ自身」の大半は、1996年から2002年にかけて書き継がれた「海外手帳」という新聞コラムであり、時事的な話題が多い。ただし、よく見られる単なる異国趣味的なあるいは先取り的な紹介ではないゆえに嫌味なく読める。これは「異文化紹介の視点 あとがきにかえて」で筆者が述べているように、日本もドイツも基本的に同じという普遍主義的な前提に立った上での紹介であるからだ。第二部最後のエッセイ風の論考「ドレイと雑種」は、筆者ほど長期ではないが同じくドイツの地で学んだ経験のある評者にとって、確かにその通りだと共感を覚えるところが多々あった。論全体の趣旨も評者としては基本的に自分に近いものを感じているが、確かに「雑種主義」では意気も上がらない気がする。

* * *

以上、本書の構成にしたがって見てきたが、アドルノの文化論については、これから検討さ

れるべき問題がまだ多く残されているものと思われる。たとえば大衆文化・文化産業のとらえ方をめぐる問題などがそれである。だが本書は、アドルノ文化論をさらに研究していく上で必ず読まれるべき「基礎的二次文献」の役割を、まさにこれからも果たしていくものと思われる。
(はら ちふみ・福山大学人間文化学部専任講師)